帝京大学 福岡医療技術学部 2019 年度 海外研修(デンバー)報告

文青:三木 菜緒美

<はじめに>

2019 年度も 「海外の医療制度を学ぶ」 という目的のもと、アメリカのコロラド州デンバーにて9日間の研修を実施した。参加者は、学生30名、引率者3名、合計33名。

	PT 3 年生	OT 3 年生	NS 2 年生	RT2年生	合計	引率者
男性	12	2	0	2	16	2:丸山 (PT)・沖 (OT)
女性	9	3	2	0	14	1: 三木 (OT)
合計	21	5	2	2	30	3

※ PT…理学療法学科、OT…作業療法学科、NS…看護学科、RT…診療放射線学科

4月24日に希望者を対象とした全体説明会を行い、5月31日を締め切りとして参加者を募った。デンバー研修は、昨年度より「国際事情」(自由科目)として単位認定科目となっていたが、単位対象者(RT2名)が参加することになったのは今年度が初めてである。これに伴い、事前研修として学内研修を4回行い、英会話に加え、現地研修でのより良い理解につながる内容を専門の先生方にお願いし、講義を行っていただいた。また、帰国後は、事後研修を3回行い、レジス大学の先生方への手紙執筆と、全学生及び教職員への参加学生による大報告会を行い、デンバー研修のまとめとした。現地研修中、学生は、医療施設として、レベル II 外傷センターのあるパーカー・アドベンチスト病院と脊椎損傷専門のクレイグ病院を訪問し、アメリカにおける医療を見学した。アメリカでの諸問題への取り組みやQOLの捉え方、リハビリテーションの考え方や価値観の違いなど様々な点において日本と相違点があることを発見し、積極的に質問をしながら確実に自らの視野を広げている様子が見て取れた。またレジス大学では、日本では絶対にできない医療的手技であるドライ・ニードリングや解剖、抜糸・抜鈎などを体験させてもらい、現地学生とも懸命にコミュニケーションをとりながら、かけがえのない貴重な経験を自分のものにしていたようである。

文化面ではダウンタウンでのスカベンジャー・ハンティングや野球観戦、乗馬やロッキー山脈ハイキングを通して、アメリカの雄大な自然を満喫し、日頃できない活動を楽しみながら、アメリカの文化を体験することができた。

<研修概要>

- 1) 期間:9日間 2019年8月31日(土)~9月8日(日)
- 2) 参加人数: 学生30名、引率者3名、計33名
- 3) 宿泊先: Staybridge Suites Denver-Cherry Creek / YMCA Snow Mountain Ranch-reunion cabins
- 4) 内容の概要: ① 病院・施設訪問見学
- ② 大学訪問見学、授業・実習参加
- ③ アメリカの医療に関する講演
- ④ 文化活動(野球観戦・乗馬・キャンプ・ハイキング)
- 5) 単位認定:自由科目 「国際事情 (Overseas Cultural Affairs) 」 1 単位 (今年度対象は RT 2 年生のみ)
- 6) 引率教員:沖雄二(作業療法学科教授)、三木菜緒美(作業療法学科准教授)、丸山倫司(理学療法学科講師)
- 7) 査証取得: 渡米前のオリエンテーション時に ESTA を申請
- 8) 保険:学研災付帯海外留学保険
- 9) 企画管理部門: 帝京大学福岡キャンパス、海外研修小委員会
- 10) 取扱業者: Colorado House International, LLC、株式会社 JTB、株式会社帝京サービス

<現地研修スケジュール>

<主な研修内容>

1) U.S.オリンピック&パラリンピック・トレーニング・センター(U.S. Olympic & Paralympic Training Center) 見学

アメリカでは、毎年9月の第1月曜日は Labor Day で祝日となっているため、この日に訪問できる唯一の施設が、コロラド州中南部の都市コロラド・スプリングス(Colorado Springs)にある U.S.オリンピック&パラリンピック・トレーニング・センター(OPTC)になる。アメリカのアマチュア・トップ・アスリートたちが各種トレーニングを行えるスポーツ施設であるが、国家予算ではなく、全てが民間企業による寄付や市の支援によって運営されている。低酸素トレーニングなど様々なトレーニングを行える施設のほか、理学療法士、生理学者、栄養士、心理学者などスポーツ医療に携わる専門家がこの施設で働き、あらゆる面でアスリートたちをサポートしている。

当日は高速道路の流れがよく、予定よりかなり早く到着することになったため、急遽、「神々の庭(Garden of the Gods)」と呼ばれる国立公園に立ち寄り、自然が生み出した見事な造形美を楽しむことができた。その後 OPTC を訪問。2020 年の東京オリンピックに向けて選手選抜の試合がある時期であったため、アスリートたちのトレーニング姿を見ることは叶わなかったが、この施設に 10 年勤めているベテランガイドと若手ガイドの 2 名の説明を受けながら、高地トレーニング室やティーチング・キッチン、体育館、射撃練習場、ボクシング練習場、スイミング・プールなど各種トレーニング・ルームを見学した。始めは遠慮がちな学生であったが、次第にスポーツ医療や各種スポーツにおける文化的背景の相違などについても活発な質問が出るようになり、全体的には予定を 30 分ほど超過してしまうほどであった。最後に、選手たちの栄養管理を担っているアスリート・ダイニング・ホールでスタッフとともに昼食をとり、そこでも懸命にコミュニケーションを取ろうとする学生の姿があった。その後はキャッスルロックのアウトレットでショッピングをして 2 時間を過ごし帰路に着いた。



「神々の庭」を背景に



OPTC のトレーニング・ルーム

2) パーカー・アドベンチスト病院 (Parker Adventist Hospital) 訪問



朝倉由紀先生

① 講演 1 「米国におけるヘルスケアシステムと多職種連携ケア」 朝倉由紀先生(看護学博士、がん認定看護師、緩和ケアコンサルタント、ナースサイエンティスト)

パーカー・アドベンチスト病院の緩和ケアコンサルタントであり、日米で幅広く活躍している朝倉先生より、「米国におけるヘルスケアシステムと多職種連携ケア」について講演を行っていただいた。日米の健康保険制度の違いや、アメリカにおける医療従事者教育、肥満学(Bariatrics)に基づくヘルスケアのあり方、言語バリアの問題、様々なケア施設、シェアド・ディシジョン・メイキング(Shared Decision Making)やケア・ゴール・ディスカッション(Care Goal Discussion)についてなど様々な観点について、わかりやすくお話ししていただいた。特に、肥満患者に合わせた医療機器の変化

や、アメリカにおける言語バリア問題の解決方法、ケア・ゴール・ディスカッションと認知症の問題などは朝倉先生ご自身の経験を交えつつお話ししていただき、考えさせられるものであった。また朝倉先生自身の渡米の経緯など学生の素朴 な質問にも気軽に答えていただき、学生にとって刺激的かつ興味深い内容だった。

② 講演 2 「チャプレン (Chaplain) という仕事」 Mr. Edrey Santos (パーカー・アドベンチスト病院主任チャプレン)

朝倉先生の講演の後、パーカー・アドベンチスト病院の主任チャプレンであるエドレイ・サントス氏が「チャプレンという仕事」について講演を行っていただいた。サントス氏は、チャプレンという仕事を、全人的医療(holistic medicine)という考え方に基づいた心のケア・ワーカー(Spiritual Care Worker)であると説明し、その仕事内容やチャプレンになるための教育課程について説明していただいた。最初にアニメ映画 『カールじいさんの空飛ぶ家(Up)』の冒頭を見せ、言語や文化背景の違う日本人学生でもわかるような工夫がなされていたところはさすがであり、またチャプレンのサポート対象が患者だけでなく看護師や医療スタッフを含むこと、あらゆる宗教の人々と偏見なく話ができなければならないことなど、難しい内容を丁寧にそして具体的にお話ししていただいた。それに対する学生からの質問も、自らが実習の中で感じた問題点に関する事柄であり、医療従事者として働く学生の将来に非常に役に立つ話であったと感じた。



チャプレンのエドレイ・サントス氏





積極的に質問する学生たち

③ 病院見学

2 名の講演の後、学生たちは3 つのグループに分かれて病院見学を行った。パーカー・アドベンチスト病院は、Centura Health グループが運営する病院の1 つであり、レベル II 外傷センターのある急性期病院である。見学は、まず心臓カテ

ーテル術室を訪れた。カテーテルやバルーン、ステント、ペースメーカーなどの医療器具を手にし、治療の方法や実際の動画を見せてもらった。がんセンターでは、放射線治療に使う機器を見せてもらい、がん治療におけるセラピストたちとの連携内容や、ナース・ナビゲーターの仕事、サバイバーシップ(Survivorship)についてなどの説明があった。リハビリテーション・ルームや薬剤室の他、家族も宿泊可能な個室である病室も見学でき、日本との共通点や相違点を確認できる充実した施設見学であった。



心臓カテーテル術室

3) クレイグ病院 (Craig Hospital) 訪問

クレイグ病院は、US News & World Report で 30 年連続全米トップ 10 に入っているリハビリテーション病院であり、脊髄損傷と外傷性脳障害を専門としている。まずは、アデル・スタルダー(Adele Stalder)氏より、病院の歴史、施設概要、職員の職種、病院内のリハビリテーションの特徴についての説明があった。その後、スタルダー氏とキャンディー・テファティラー(Candy Tefertiller)氏のガイドのもと、2 グループに分かれて施設見学を行った。最初に、エンジニア部門となる車椅子クリニック、リハビリテーション・エンジニアを訪れ、いかに患者のニーズに合わせて車椅子がカスタマイズされているかを知り、学生たちは驚きの表情を浮かべて見学していた。その後、PEAK センター(PEAK は Performance, Exercise, Attitude, Knowledge の頭文字)と名付けられ、大きなリハビリテーション・マシンやブールなどの設備があるエクササイズ・センター、様々な障害物を車椅子で行ける屋外のトレーニング・パーク、車や飛行機の移乗トレーニング・ルーム、車椅子に乗った状態でベビーカーを押すなど子育てを想定した練習ができるトレーニング・ルームやレクリエーション・エリアなどを見学して回り、施設・設備の充実ぶりに学生たちは圧倒された様子であった。この施設は近くのコミュニティーから訪れるボランティアも受け入れており、施設利用者やその家族、病院のスタッフとボランティアみんなが連携し、互いが家族の一員のように関わり、「リハビリテーションを楽しく」をモットーとしていて、学生たちはそれを施設利用者の積極的な姿勢と笑顔から感じとっていた。日本との違いを知ることで、自分たちの将来について色々と考えることができた刺激的な施設訪問であった。



質問に答えるスタルダー氏(左)とテファティラー氏



通訳を介して話を聞く学生たち 放射線治療室にて



車椅子の男性がリハビリテーション・エンジニア



スタルダー氏と記念撮影 病院の庭にて

4) レジス大学(Regis University)訪問

理学療法学科のレインキング学科長(Mark F. Reinking, PT, Ph.D., SCS, ATC)とゴーマン副学科長(Ira Gorman, PT, Ph.D.)からのお出迎えを受けて、まずはホルム准教授兼 OT プログラム・コーディネーター(Suzanne Holm, OTD, OTR, BCPR)から、レジス大学とクレイトン大学のパートナーシップによる OTD 遠隔ハイブリッド・プログラムの現在の状況と今後についての短い説明があった。その後、ゴーマン副学科長によるウェルカム・プレゼンテーション「アメリカにおける理学療法教育(PT Education in USA)」を行っていただき、PT の歴史と教育システム、アメリカ理学療法士協会が掲げる Vision 2020 についての話があり、そしてレジス大学の PT についての紹介があった。その後、①PT/RT 班、②OT 班、③NS 班の3つに分かれて、それぞれの実習に参加した。







ゴーマン副学科長

ホルム准教授

ウェルカム・プレゼンテーション風景

① PT/RT 班:ドライ・ニードリング実習

理学療法学科・診療放射線学科の学生は、ドライ・ニードリング実習に参加した。ドライ・ニードリングという手技は、

針(Needle)を用いており、針治療(Acupuncture)に似ている。針治療は鍼灸師が従事し、東洋医学を由来とした技術体系を用いるが、ドライ・ニードリングは西洋医学に基づいており、筋のトリガーポイントを正確に触察し、その上で針を刺入する。ペンネル・ノエル先生(Patty Pennell-Noel, PT, ScD.)の講義では、スライド資料で筋の解剖を中心に説明され、ニードリングのテクニックに加えて、触察の技術が重要とされている印象であった。その後、レジス大学院生のリードで、本学学生もニードリングを体験した。レジス大学院生は習熟度に応じてクラス分けされており、クラス1と呼ばれる習熟度が高い学生の指導のもとで行った。本学学生は針を刺入されるのもするのも、ほぼすべての学生が初めてであり、当初は戸惑いながらであったが、クラス1学生の指導を受けてしっかり体験することができた。学生にとっては、日本にはない技術であることから、本海外研修ならではといえる、最も貴重な体験の1つとなった。同時に、ニードリングに必要な体表から筋を触察する技術が本学1年次に徹底的に行われていることが、本学学生の自信に繋がったと思う。



ペンネル・ノエル先生









実際に針を打たせてもらう学生たち

② OT 班: PDMS-2 (微細運動評価) の授業・実習

OT 班はホルム准教授の指導のもと、出生直後から 5 歳児までの成長過程の様々な姿勢反射、粗大運動能力、微細運動能力の評価である PDMS-2 (Peabody Developmental Motor Scales, Second Edition)の学修授業に参加した。その後、6 名ずつのグループで、メンバーそれぞれが子ども役をし、他のメンバーが対象者を評価した。雰囲気が良く、通訳がなくても場に馴染むことができたようだ。学生からは講義形式よりグループワークの方が学修効果が高いとの指摘があり、またグループ内では常に質問が飛び交い、全体でも話し合いが活発に行われ、その積極性から学ぶものが多かったということであった。



ブレイン・アーキテクチュア・ゲーム



発達評価の練習風景



ブレイン・アーキテクチュア・ゲーム

③ NS 班:滅菌グローブの着脱の仕方、抜糸と&抜鈎

フラー准教授(Sherry Fuller, DNP, MSN, RN, FNP-C)に案内され、本学看護学科の学生 2 名が、看護の授業を受講し始めて 2 週間の学部 3 年生の実習に参加した。本学からは 2 名だけであったこと、皆に注目されて教室に入ったことで、始めは非常に緊張していた様子であった。授業はまず滅菌グローブの着脱についての説明があり、その後実際に学生がきちんとできているかどうか、グループごとに 1 名ずつ確認テストを行っていった。確認テストは、学生が口頭で自らの行動を解説し、また質問者の質問に答えながら行われるスタイルで、日本との違いに戸惑っていたようであったが、すでに学修していたことであったため、次第に落ち着いて行えるようになっていった。

次に、フェイク・アームを使って抜糸や抜鈎の練習を行った。本学学生にとっては初めての経験であり、指導員に器具の持ち方や使い方など丁寧に指導してもらい、笑顔も見られるようになり良い経験ができた。その間にも日本とアメリカの死亡原因トップ3の違いやアメリカの刑務所での看護経験、病院の種類の違いなどの話もでき、学生にとっては良い刺激になったようである。



滅菌グローブ装着



抜糸の練習

④ 午後:解剖学実習

お昼は、ピザランチをとりながらレジス大学の学生たちと交流を行った。 靴の持ち主探しゲームでグループを作り、英語が苦手な学生は、ジェスチャーを用いたり、スマートフォンを用いたりと工夫しながらコミュニケーションをとり、短い時間であったが楽しく交流できたようである。

その後は、バーンズ准教授(Clifford L. Barnes, Ph.D.) に案内されて、解剖学の実習に参加した。レジス大学の医学生たちとともに、背中の外部筋肉を確かめながら、多くの学生が実際にメスを手にし、組織の剥離等を経験させてもらっていた。臭いや実際の解剖に気分が悪くなる学生もいたが、その



靴の持ち主探しゲーム

場合には退室を促して休息させた。一方で、テーブルに他の臓器を出してもらい、脳や脊髄、心臓などを手でとって確認 する学生もおり、大変貴重な経験となった。

解剖実習の後は、ゴーマン副学科長にキャンパス・ツアーを行ってもらい、大学のショップまで案内していただいて終了となった。



現地学生との交流@ランチ



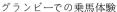
ゴーマン副学科長へお礼のスピーチ

5) ロッキー・マウンテン国立公園 乗馬・自炊

予定では 8 時にホテルを出発し、午前中に山荘で自炊する夕食の買い出しをして、午後に乗馬クルーズの予定であったが、午後から天候が荒れることが予想されたため、急遽午前と午後のスケジュールを入れ替えることにした。それに合わせて、この日の朝の出発は 7 時ということになった。皆、一旦ホテルをチェックアウトし、チャーターバスに乗ってロッキー・マウンテン国立公園を目指した。途中、トイレ休憩にバーサッド・パス (Berthoud Pass)に立ち寄り、アメリカの壮大な自然の景観美を堪能し、グランビーのハイ・カントリー・トレイル (High Country Trails)に到着後、2つのグループに分かれ、約1時間ずつの乗馬を楽しんだ。

その後、グランビーのスーパーマーケット近くのマクドナルドで昼食をとり、それから約1時間、夕食および朝食の買い出しを行った。YMCS スノー・マウンテン・ランチ(Snow Mountain Ranch)山荘にチェックインし、自炊を開始。メニューは、カレー、グラタン、トマト煮込みスープ、餃子、サラダ、野菜炒め、おにぎり、キングサーモン BBQ、豚肉の生姜焼き(丸山先生作)など豪華なものとなった。途中失敗などもありながら、「きのこなし」や「ニンニクなし」の料理札をつけたりして、仲間の好き嫌いに配慮した優しさが表れていた。







自炊後の乾杯

6) ロッキー・マウンテン国立公園ハイキングと研修修了式

最終日は、7時半に山荘をチェックアウト・出発し、ロッキー・マウンテン国立公園の頂上付近 (標高 3,595m) にあるアルパイン・ビジター・センター (Alpine Visitor Center) までチャーターバスで向かい、そこから3つのグループに分かれて、約6.4kmの下りハイキングコースであるユート族のトレイル (Ute Trail) を、チャーターバスが待機できるミルナー・パス (Milner Pass) まで歩いていった。ここは1つのハイキングコースで3種類の生態環境を通ることができるところで、ほとんど樹木のない高地ツンドラ・エリア



から、松の木が茂る森林地帯、そしてモレーンと呼ばれ氷河が谷を削り堆積物 アルパイン・ビジター・センター

でできたエリアであるパウダー湖(Poudre Lake)周辺へと抜ける。ツンドラ・エリアでは、マーモットやピグミーの姿が見られ、またハイキング途中には、いくつかの美しい湖や雪解け水が流れるところがあり、何度も休憩しながら約2時間半かけて目的地であるミルナー・パスに辿り着いた。ミルナー・パスからは再びバスに乗ってアルパイン・ビジター・センターに戻り、昼食・自由行動の後、そのままバスでデンバー市内のホテルへと向かった。

夜は、ホテル近くのレストラン(Jax Fish House & Oyster Bar)にてフェアウェル・ディナーであった。それぞれがメニューを見ながら、食べたいコースを選ばなければならなかったが、料理を選んだり、お肉の焼き方を伝えたり、何とか楽しみながら注文することができたようである。学生の人数が 30 名と大人数だったので、最後のスピーチは学科ごとに1名ずつ(PT は男女1名ずつ)前に出てもらい、研修についての思いをスピーチした。現地コーディネーターからの励ましの言葉もいただき、その後、1名ずつに研修修了証書の授与を行った。





ユート族のトレイル・コースのハイキング@ロッキー・マウンテン国立公園

<まとめ>

今年度は、長年海外研修を担当なさっていた木村先生のご退職に伴い、新体制での研修企画・実施となったが、現地コーディネーターの臨機応変な対応と、これまでと変わらぬご協力のおかげで、素晴らしい価値あるデンバー研修にすることができたと思う。9日間という短い研修期間ではあるが、医療・語学・文化という3つの要素がバランス良く組み込まれており、更に普通の海外旅行ではとてもできない貴重な医療体験ができる本研修は、帝京大学福岡キャンパスの魅力の1つであることは間違いないと確信した。



コーディネーターのグッドマン夫妻



現地アシスタントの方とともに



研修リーダーの吉田くん



研修副リーダーの井之上さん



研修修了式